

さ さ べ ま さ と し
笹部 昌利

文化学部 准教授
 博士(文学)／佛敎大学

🏠 ホームページ URL
 なし

主な研究業績

- 「幕末期における土佐藩国事運動のかたち―「土佐京都藩邸史料」試論」、単著、2020年2月『日本歴史』861号、pp70～80
- 「文久政治」と朝議参与―大名による国事運動とその限界―」、単著、2019年6月、原田敬一編『近代日本の政治と地域』吉川弘文館、pp22～56
- 「禁門の変と畿内諸藩の軍役―淀藩・膳所藩・西大路藩を素材に―」、単著、2019年3月、『京都産業大学日本文化研究所紀要』24号、pp1～40
- 「淀藩稲葉家と禁門の変―「淀藩家士日記」からみた幕末期の軍役」、単著、科学研究費補助金基盤研究C (No.2670805) 研究成果報告書「近世中後期上方支配における山城国淀藩の基礎的研究」(代表：母利美和・京都女子大学教授)、2018年3月、pp83～96
- 「薩摩藩二本松屋敷の政治的意義―鳥津家の「国事」と京の拠点―」、単著、2017年3月、『京都産業大学日本文化研究所紀要』22号、pp1～31
- 「幕末期の国事システムと大名「御側」、単著、2017年3月、鳥取藩政史研究会編『鳥取藩研究の最前線』鳥取県立博物館、pp303～325
- 「幕末維新期の「農兵」と軍事動員―鳥取藩領の事例を素材に―」、単著、2016年3月『京都産業大学日本文化研究所紀要』21号、pp21～48
- 「大名家よりの使者と近世京都―佐賀藩鍋島家の事例を素材に―」、単著、2016年3月『京都産業大学日本文化研究所紀要』21号、pp1～20
- 「山中静逸と幕末政治―「柳の囃子」がつかないもの―」、単著、2015年1月、『山中信天翁と幕末維新』、pp96～103
- 「勝海舟―その軍事構想と日本型華夷意識―」、単著、2014年9月、趙景達他編『講座 東アジアの知識人』1巻、有志舎、pp292～309
- 「近世の政治秩序と幕末政治―鳥取藩池田家を素材として―」、単著、2008年1月、大阪歴史学会『ヒストリア』208号 pp109～138
- 「京よりの政治情報と藩は決定―幕末期の鳥取藩池田家の情報収集システム―」、単著、2006年10月、家近良樹編『もうひとつの明治維新』(有志舎) pp135-169
- 「「人斬り」と幕末政治―土佐藩山内家の政治運動と個性―」、単著、2005年9月、佛敎大学鷹陵史学会編『鷹陵史学』31号、pp170～195

研究テーマ Research theme

幕末維新政治史の研究

概要 Overview

19世紀における日本の政治変動、特に、幕末維新时期における大名家中の政治意思決定システムについて研究をしています。「明治維新」の政治過程は、戦前よりわが国における政治社会の変革のモデルと解され、まさに「革命」の歴史として取り扱われてきました。おもな研究対象は、鳥取藩池田家、薩摩藩島津家、土佐藩山内家です。その政治社会の構造を、当該期に作成された歴史資料(古文書)から読み取り、1860年代の政治過程は確実な段階を踏んだ政治推移(「政務移譲」)の過程であると確信しました。日本近代において、「幕末維新」、「明治維新」は、燦然として輝かしき歴史でなければなりません。それは、日本近代の正当性を説明づけるものであったからです。私たちがイメージしてきた「維新」の歴史観は、日本近代におけるニーズによって再生産されてきました。こうした諸前提を取り除き、大名家中における政治意思決定と実際の政治行動との連動性を解明し、「幕末維新」、「明治維新」という時代に対するあらたな視角を提示したいと考えます。

さらに歴史観の観点から、「幕末の志士」と呼ばれた人びとのイメージ生成についても考察しています。「幕末の志士」は、日本近代における理想像でした。その理想的人材が幕末期に存在したという仮説によって生み出された存在であり、近代日本人の模範と解されたのです。そうしたイデオログ形成の問題について、近代ナショナリズム論の観点から考察したいと思います。

応用分野 Application areas

近世近代政治制度史、近世・近代地域史、歴史資料論、古文書学、日本文化論

共同研究等へのニーズ Need for joint research

歴史資料の解読および明治維新論にかかる共同研究組織を立ち上げたいと考えています。2016年より取り組んできました科学研究費補助金(基盤研究C)による「丹波亀山藩松平家資料に関する政治史的研究」を2020年3月に終了しました。今後は、幕末期における土佐藩政治史料の調査、研究を行なうべく、外部資金の獲得を目指したいと思います。